

生意気な元カレに

電車で痴漢
されています

青木 名子

「……っ、」

零れそうになる吐息を、ぐっと押し殺す。出かけた吐息に熱が混じっているのを知られたくなくて、私は顔を俯かせた。

華金と呼ばれる金曜の今夜。飲み終えた人たちが、あとは帰るだけだと、少ない隙間に無理やり身体を捻じ込ませて電車に乗る。そのため、時間はすでに夜の10時を回っているものの、ピークを過ぎたはずの電車内は通勤ラッシュと同じくらい混んでいた。

そんな中、なんとか扉の正面に立つことに成功した私は、

痴漢に遭っている。

「ん……、っ♡」

お尻にそわりとした感覚が広がる。電車の大きな揺れに合わせて、タイトスカートを履いたお尻にまた何かが触れた。まるでヒップラインを確認するように、男らしい大きな手の平がお尻を撫でる。

周りに気が付かれないよう秘密裏に行われる、その愛でるような手つきにまた熱い吐息が出そうになる。私は目線だけを上げ、夜の扉の窓に映る背後を見た。

ワックスでラフに整えた髪に、長いまつ毛が縁取る涼しげな目、スツとした鼻筋。着こなしたスーツには、シワひとつない。背後に立つそんな男は、

私の、元カレだ。

よく知り、よく知られている彼に見られたくなくて、私はきつと赤くなっている顔をまた俯かせた。



社内恋愛は、別れたあとが面倒くさい。

そのことに気がついたのは、実際に彼と別れてからだ。

部署全体で取り組んだプロジェクトは大成功を収めた。その打ち上げとして開かれた飲み会は、肩の荷が降りた開放感からか、大いに盛り上がりを見せて

いた。

私はカクテルを片手に、賑やかなグループを横目に見る。女子の歓声に囲まれているのは、上村 俊介。私の元恋人だ。今回のプロジェクトリーダーでもある彼は、女子だけではなく、年配の上司からも後輩からも一目置かれていて、盛り上がりの中心にいた。

一方、私はいえ、隅っこの席で同期とお酒を飲みながら、内心、不貞腐れていた。だって、このプロジェクトは、本来なら私がリーダーをやるはずだったから。

同じ部署で働いていると、こうなる。彼の存在が嫌でも目に入るのだ。生意気な性格だが、仕事ができ、人望があつて、周りから賞賛される元カレ。その姿を見せつけられるたびに、胸に複雑な気持ち湧き起こる。

はいはい、よかったですね。心の中でそう悪態を吐きながら、楽しそうに談

笑する彼から視線を外して、——私はまた視線を戻した。上司が彼にお酒を注いでいるのが見えたからだ。

お酒、苦手なのに。思わず、飲んでいたカクテルのグラスを止める。仕事ができ、人望があつて、周りから賞賛されて。そんな彼は、実はお酒に弱い。すぐに赤くならないからか、職場の人たちはそれに気が付いていないし、彼も周りにお酒が弱いことを隠している。知っているのは、私だけだ。

馬鹿だなあ、テキトーに流せばいいのに。アルコールに絆されて、おぼつかない足取りで帰り道を歩く彼が脳裏をよぎる。飲み会がお開きになると、私の足は電車に乗る彼を自然と追っていた。

これが、悪かったんだなって、今では思う。

彼はふらつきながら電車に乗ると、ロングシートの端に腰を下ろし、壁に寄りかかって大きく息を吐く。酔いのせいで、いつも余裕そうに見える顔にはほんのり赤みが差し、眠たげにも見える姿はどこか無防備だった。

タクシーくらい呼んでやるか。少し離れた場所から彼の様子を見ていた私は、スマホを取り出した。彼の自宅の最寄り駅にタクシーを呼ぼうと、アプリを開いて、必要な項目を入力する。すると、突然、背後から聞き慣れた声がした。

「理子…？」

名前を呼ばれ、電車の扉を前にして立っていた私は顔を上げる。夜の扉の窓には、まるで鏡のように背後に立つ彼が映っていた。

「ホントに理子じゃん…」

「上村さ——」

その瞬間、「○○駅、○○駅、です」とアナウンスが流れ、私の言葉は遮られる。電車は駅に停車したところで、私がいる場所とは反対側の扉を開けると、ホームからは電車に乗り込む帰宅客の波が一気に流れ込んできた。

人が人を押しながら電車に乗り込んでいく。その濁流に押され、彼がバランスを崩し、扉に、——私の顔の横にドンと手をついた。急に彼との距離が縮まる。

「なに、心配して付いてきてくれたとか…？」

電車が発車する。触れてしまいそうなくらい、彼が近くに居るのに。

扉に手をついた彼は、ボリュウムを絞った声で私にそう聞く。酔いが回って熱のある吐息は、ハイボールの香りがした。

「違います、たまたま…。たまたま、こっち方面に用があっただけです」

身動きが取れないほど混んだ車内では、彼の方を向くことはできない。扉の

前に立つ私は、私に覆い被さるように立つ彼の影の中から、そのまま話した。私たちは、もう恋人じゃない。ただの会社の同僚だ。いつも社内で行っているように、私は事務的に返す。

すると、彼が何かに気が付いたようだ。胸元でスマホを持つ私の手に、彼が緩やかに手を重ねる。そのまま私のスマホを持ち、画面を見た。

「俺の最寄り」

「っ、」

画面には、彼の家の最寄り駅が表示されていた。「××駅、1〜5分で乗車可能です」とタクシアアプリが分かりやすく検索結果を表示している。

しまった。さっき検索してそのままだった。……なんて思っても、もう遅い。酔った頭では、都合のいい言い訳をすぐに思い付くこともできない。思わず、言葉に詰まった。

「未練、……あるんだ？」

「……、ないです」

私が素っ気なく答えれば、彼も「そ」と素っ気なく返してくる。

このまま一緒に居ると、別れた時みたいになまたケンカしてしまいそうだと。次の駅で降りて帰ろう。そう思った矢先のことだった。

すり……。彼が私の頭に、自分の頭を寄りかかせてきた。

「……俺は、ある」

「え、」

とくん。彼の言葉に、不覚にも胸が跳ねる。未練って、なに。ケンカ別れをしてもう数ヶ月経ってるのに。

私の顔の横に突いていた手が離れる。そのまま、彼の腕が腰に回ったかと思うと、ゆっくりと抱きしめられた。強くない、優しい力。けれど、それは、離

したくないという意思を感じるものだった。やさしく、大切そうに包まれる感覚に、胸が甘い音を立てる。

「理子の匂い、久々……」

彼が私の肩口に顔を埋める。そして、彼の長い鼻先が、首筋を撫でた。下から上へ、すう、と鼻を通る息が首筋を掠めていく。それは、ぞくぞくぞく

……、と背中が震えるような感覚を連れてきて、私の顔は羞恥で熱くなった。鼻先は髪をかき分け、彼の柔らかい唇は熱い吐息と共にそつと耳裏に触れる。まるで口付けるようなその仕草に、居た堪れなくなる。

「上、村さん、」

嗜めるはずが、声はか細くなってしまう。名前を呼んでも、彼は止まってくれない。彼は甘える猫のように、すり、と私の頭に額をゆるく擦り付けた。

酔ってる。酔ってなかったら、彼はこんなことをしてこない。

別れてからの彼は、付き合う前の生意気な彼に戻っていた。今日だって、「ミス、多過ぎませんか？ 体調管理できてるんですか？」って煽るように言ってきたのに。なのに、いまの彼は、仕草も、声も、お酒に溶かされたみたいに甘ったるい。

別れたのに、くらくらしてしまいそうになる。そう思っていると、
「……っ、」

お尻に、何かが触れた。柔らかい布越しに伝わる感触に、息が漏れそうになるのをぐっと押し殺す。出かけた吐息に熱が混じっているのを知られたくなくて、私は顔を俯かせた。

タイトスカートの上からまるでヒップラインを確認するように、大きな手の平がお尻を撫でる。周りに気が付かれないようにこっそり行われるそれは愛撫にも似ていて、思わず肩を震わせた。

私は目線だけを上げ、夜の扉の窓に映る背後を見る。こんなことをするのは一人しかない。――彼だ。

窓に映る彼は、酔いと満員電車の暑さから、はあ、と熱い息を零す。ハイボールの香りが混じるそれを首筋に感じれば、彼の気持ちが昂っているのが手に取るように分かった。

まずい。酔った頭に残こる少しの理性が警鐘を鳴らす。やめてください、と反射的に言いそうになって、私はその言葉を飲み込んだ。

ここで声を上げたら、彼が捕まってしまう。

「応援してるよ」

付き合っていたあの頃、そう言って、屈託なく笑ってくれた彼の人生に、傷

がつく。そう考えると、声を上げるなんてできなかった。

幸い、まだ周りには気付かれていない。周りの乗客たちは、イヤホンをしていたり、寝ていたり、スマホゲームやサブスク動画に夢中だ。

周りに気が付かれないように、止めさせないと。満員電車で身動きが取れない中、私はお尻を撫でる彼の手をなんとか掴む。だが、

「逃げるつもり……？」

彼がそう囁いた。それから、

「……逃すかよ」

ぐっと低くなった声が、宣戦布告みたいに、そう告げた。やっと、捕まえたのに、と独り言が聞こえたのは、気のせいだろうか。

「あ、」

ひたり。彼の熱くて大きな手の平が、包み込むように私のお腹に覆い被さ

る。彼が何をし始めるのか分からない。分からないのに、彼の指の延長線上にある秘部に熱が集まるのを感じた。

「や……、」

焦らすように、彼の手の平がお腹を撫でながら下へ、下へと滑らかに降りてくる。忍び寄る指先に秘部がじわじわと熱くなっていくのが分かった。

タイトスカートの上だ。直接じゃない。それでも、彼の男らしい太い指が秘部に辿り着くと、布越しに触られた感覚に身体が熱くなり、思わず太ももを擦り合わせた。

「っ……♡」

タイトスカートの上から、彼の手が私の秘部を撫でる。最初は、その形に触れたか触れなかったか分からないほどの優しいタッチで。次に、凹凸を記憶するかのようにじっくりとその輪郭を指先の腹でなぞる。凹凸に指が掠めると、